

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-1 1

横田はしばらく唐刷毛で淫楽に耽った後、『オーパス・ワン』が注がれたワイングラスに平筆を入れてたっぷり含ませると、真紀の陰部をなぞり始めた。

繊細で巧みな筆遊びに真紀が官能の疼き顔を見せる。「貴女だけ愉しむのは、けしからん」と横田はリーデルの大ぶりのワイングラスの縁に平筆をそっと置いて、「私も楽しませてもらうよ」とわざと尊大な口調で言って、わかめ酒もどきを興じ始めた。

真紀が官能の波にさらわれそうになると、彼は真紀の秘密の壺を噛み、瀬戸際で引き戻した。

それはまるで人体の細胞数は約三十七兆個と言われているが、そのうちの分化した何兆個かがオーガズムの扉を開けようとする変化のメカニズムを制御する術を横田が駆使しているかのようであった。

真紀は文句のつけようもない裸体を三本の蠟燭の揺れる火で浮き彫りにさせていた。

「意地悪ね……」と真紀は濡れた声で言う。

「完璧なフルボディだ！出来映えは想像以上だ！まるで裸のマハだ！」と横田は吠える。

「喉がカラカラ……。私にも飲ませて……」

真紀はベッドから半身を起しながら乾いた声で言った。

傍に置いてある絵筆掛けにワイングラスの縁に置いてあった平筆を戻した横田は、いそいそとカリフォルニア産の極上赤ワインを継ぎ足すと真紀に差し出した。

ワインをひと口含んで舌の上で転がしている真紀の姿態を、しばらく画家の眼で見ている横田は、おもむろに立ち上がると裸のままアトリエに下りていった。

真紀は横田が次にどんな手を打ってくるのか、いつもテーマがあって、その中でサーカスを見せていくシルク・ドゥ・ソレイユの出し物を期待して待っていた時と似たような気持ちで胸を高鳴らせていた。

階下のハイエンドオーディオからピアノ曲が程好い音量で流れ始めた。

男がこのタイミングでショパンの『バラード第一番』をかけるのは五年ぶりで、ワインとショパンとのマリージュを女性と試みるのは二度目である。一度目の女の名は城山聖子と言って、国立西洋美術館の学芸員をしていた。見た目は地味であったが、いくつもの浮名を流してきた男には、いつになく女の心根も体もいたく気に入っていた。ところが、女の夫が自殺未遂をしでかしたことで、二人の関係は一年足らずで終わった。